

吐蕃統治期の敦煌における法華信仰

趙曉星

松森秀幸 訳

要旨・吐蕃が敦煌を統治した時期（七八一―八四八年）に、法華信仰は敦煌において依然として流行していた。敦煌文献に吐蕃時代の『法華経』写経が保存されていること以外に、敦煌の石窟には、この時期の六つの法華経変が保存され、莫高窟第三六一窟にはさらに蓮華塔式の法華塔が出現している。これらはいずれも、中唐期に敦煌で法華信仰が非常に流行していたことを物語っている。この時期の法華信仰は、盛唐時代の様式を継承した上で、さらに密教的な色彩を加え、法華信仰のさらなる展開を見せている。本稿では、中唐の敦煌文献と敦煌石窟の法華資料を整理することによって、法華信仰のこの時期における発展と特徴を概説したい。

キーワード・吐蕃、敦煌、法華

中唐の敦煌で流行した『法華経』

漢文の『法華経』には、おもに三種の訳本がある。すなわち、西晋の竺法護が訳した『正法華経』、後秦の鳩摩羅什が訳した『妙法蓮華経』、隋の闍那崛多が達摩笈多と訳した『添品妙法蓮華経』である。この中で最も流行したのは鳩摩羅什の訳本であり、敦煌文献において現存する『法華経』の数は極めて多い。方広錫『敦煌仏教経録輯校』に基づき、具体的に吐蕃が敦煌を統治した時期（七八一―八四八年）についてい

と、敦煌文献 P. 3807¹⁾ と S. 2079 の『龍興寺藏経目録』の中には、四種類の法華系経典を収録している。⁽¹⁾ すなわち、『法華三昧経』(一卷)、『法華経』(七卷、大乘の重訳経典)、『正法華経』(十卷、大乘の重訳経典)、『法華論』(一卷、大乘の論)である。このことは、当時の敦煌の官方寺院である龍興寺の中に、鳩摩羅什が翻訳した七巻本の『妙法蓮華経』と、竺法護が翻訳した十巻本の『正法華経』が保管されており、また劉宋の智嚴が訳した『法華三昧経』一卷と作者不詳の『法華論』一卷も存在していたことを物語っている。

実際の流通と使用の状況からみれば、当時は、鳩摩羅什が訳した『妙法蓮華経』と竺法護が訳した『正法華経』が中心であった。敦煌文献 P. 3432 『龍興寺器物歴』には、原本のタイトルの後に「龍興寺卿趙石老脚下依蕃籍所附佛像供養」との記述があることから、この中に記される仏教経典はすべて吐蕃時代の龍興寺の供養のために用いた経典であったことを物語っており、その中に七巻本の『妙法蓮華経』があることは、この経が供養経として用いられていたことを示してい

る。敦煌文献 P. 3010 『龍興寺歴年配補藏経録』には、末年(八一五年)に配給され補われた経典に十巻本の『正法華経』があったことが記されている。敦煌文献 S. 5076 は『点付歴』であり、この中には「正法花」と「法華経」という記述が見られ、それぞれ竺法護と鳩摩羅什の訳本を指していると考えられる。末尾に記された「巳年七月十四日、取蕃漢経本各第一袂足付令狐安、安」との記述によれば、吐蕃時期に経書を引き継いでいたことが証明されると同時に、『正法華経』と『妙法蓮華経』が実際に用いられていたことがわかる。敦煌文献 S. 6015 『妙法蓮華経』は鳩摩羅什訳本であり、末尾に「丑年閏四月五月廿四日(八〇九年)に写し終えた」と記されているが、これもこの時に七巻本の『法華経』が最も流行していたことを物語っている。敦煌文献にはさらに七件の古いチベット語の『法華経』が残っている。番号は P.10572²⁾ P.1239 P.1262²⁾ No.190⁽³⁾ No.191¹⁾ No.192¹⁾ No.351I¹⁾ である。このことは、この経は中唐期に漢訳のものとチベット語訳のものが同時に流行していたことを示している。

つまり、『法華経』は漢人と吐蕃人の共通の信仰を受けていた可能性が高い。

中唐敦煌壁画『法華経変』

吐蕃統治時代の敦煌法華経変の研究に関しては、主なものに賀世哲『敦煌石窟全集・法華経画卷』⁽³⁾と下野玲子「吐蕃統治期の敦煌『法華経変』に関する一考察」⁽⁴⁾がある。両者はいずれも莫高窟第一五九窟法華経変を中心に、中唐期の法華経変の特徴を論じている。とくに賀世哲氏は、中唐のさまざまな法華経変に対する詳細な分析を通して、中唐の法華経変が經典の意味を重視しているという重要な特徴を指摘し、書末の附録一において、法華経変の各品について統計を行っている。中唐期の敦煌法華経変の現存する六つには、莫高窟第一五四、一五九、二三一、二三七、四七二、一四四窟などが含まれる。經典の中で各品が描かれた具体的な状況は次頁の通りである。⁽⁵⁾

この統計結果からみれば、盛唐と比べて、この時期の法華経変は細部を描写することに長けており、『法

華経』諸品の秩序をもった構成を同一の図像に入れることができていた。この時期には、経変の下部に屏風絵の形式を描き加えて経変の内容を補うという新しい形式が出現しており、さらに莫高窟第一五九、二三一、二三七、一四四窟などのように、屏風絵を帯びた経変の内容は、莫高窟第一五四窟の屏風絵がない経変に比べ、確かにより多く、数品の内容を提示している。中唐期の法華経変の図像の相似性は非常に高く、このようなくつかの定型化された法華経変の底本は晩唐期において継続して用いられた。これらは、より多くの秩序をもって、『法華経』諸品の経変を描くことができており、その図像には中唐の法華信仰における経の意義を重んじるという特徴を反映している。注意しなければならないのは、中唐期において、法華経変はしばしば華嚴経変と対称となって現れており、また、これが相対的、固定的な組み合わせとなつて、この後の敦煌で『法華経』と『華嚴経』を合わせて修行するという伝統として展開していくことである。

品名	窟号	154	159	231	237	472	144
序品一		✓	✓	✓	✓	✓	✓
方便品二		✓	✓	✓	✓	✓	✓
譬喻品三		✓	✓	✓	✓	✓	✓
信解品四		✓	✓	✓	✓	✓	✓
藥草喻品五			✓	✓	✓		
授記品六							
化城喻品七			✓	✓	✓		✓
五百弟子受記品八			✓	✓	✓	✓	✓
授学無学人記品九							
法師品十			✓				
見宝塔品十一		✓	✓	✓	✓		✓
提婆達多品十二		✓	✓	✓	✓		✓
勸持品十三							
安樂行品十四		✓	✓	✓	✓		✓
從地涌出品十五		✓	✓	✓	✓		✓
如來壽量品十六			✓	✓	✓		
分別功德品十七							
隨喜功德品十八			✓				
法師功德品十九							
常不輕菩薩品二十		✓	✓	✓	✓		✓
如來神力品二十一							
囑累品二十二							
藥王菩薩本事品二十三		✓	✓	✓	✓		✓
妙音菩薩品二十四				✓			
觀世音菩薩普門品二十五				✓		✓	
陀羅尼品二十六				✓			
妙莊嚴王本事品二十七				✓	✓		
普賢菩薩勸發品二十八				✓			
合計		10	16	19	15	6	12

莫高窟第三六一窟の密教法華塔

法華経変以外に、中唐晩期の莫高窟第三六一窟東壁門上にも、この時期の敦煌で唯一単独で現れる法華塔が描かれている(下図参照)。図全体の大きさは、九一・〇センチ×五八・〇から九〇・〇センチであり、法華塔(多宝塔とも称する)を中心に行っている。『妙法蓮華経』見宝塔品は、『法華経』の内容のなかで最も重要な章である。多宝塔が大地から湧き出るとは、正法に対する一種の証明であり、「此の宝塔の中に如来の全身有り。乃往過去に、東方の無量千万億阿僧祇の世界に、国を宝浄と名づく。彼の中に仏有り、号して多宝と曰う。其の仏は菩薩の道を行ぜし時、大誓願を作さく、『若し我れ成仏して、滅度の後、十方の国土に於いて法華経を説く処有らば、我が塔廟は、是の経を聴かんが為めの故に、其の前に踊出して、為めに証明と作って、讃めて善き哉と言わん』⁽⁶⁾とある。多宝塔は空中に登り、十方世界の分身仏たちが集まってくるので、この図像は「虚空会」とも称される。

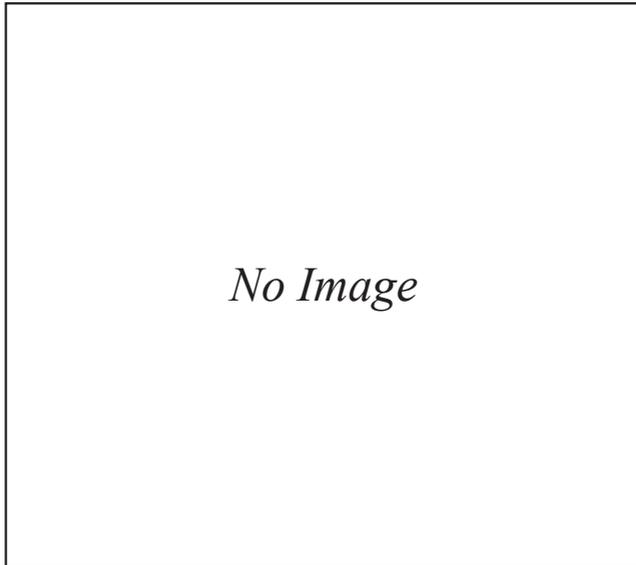


図 莫高窟第361窟東壁門上の法華塔 (筆者による模写)

従来、二仏が多宝塔の中に並坐する図像はすべて『法華経』の象徴であった。第三六一窟東壁門上には、多宝塔があり、会座に集った多くの仏や文殊・普賢の図像があるだけでなく、下の方には湧き出た菩薩もい

る。このように、この図像は『法華経』の虚空会の縮図と称することさえでき、その背後に表している内容は、法華経変全体にまで拡大することが可能さえある。図の多宝塔の中には二仏が並座し、北側の仏は左手を伸ばして手のひらを外側に向け無畏印を施し、右手は胸の前に置いて手のひらを内側に向けている。南側の仏は左手を平らにして、お腹の前に置き、右手を胸の前において説法印を作っている。塔のなかの釈迦・多宝の二仏については、やはりわずかに区別されていることがわかるが、現在のところ、どちらの仏が釈迦であり、多宝であるのかを断定することはできない。釈迦と多宝の二仏の並座はさらにある特殊な時間と空間の関係を体現している。釈迦は現在仏であり、多宝は過去仏である。両者が同時に現在の同一の空間に出現することは、釈迦は生じているが生じておらず、多宝は滅しているが滅していないという特殊な時間的概念を帯びている。言い換えれば、釈迦と多宝が同じ塔に並座することは、過去と現在の二つの時間概念の統一を現しており、この図の中において時間を連

続する永遠の直線に変化させている。塔の上方の両側面には合計で六組の一人の仏と二人の菩薩が空中から飛来する様子がある。これは十方の分身の諸仏が虚空会にやって来る情景を表現しており、十方の仏は同一の時間で異なる空間の仏である。釈尊と多宝が表現する時間概念と合わせると、この小さな虚空会の図の中に空間としての十方と、時間としての過去・現在という時空概念を含んでいる。

多宝塔の北側は獅子に乗った文殊と眷属であり、南側は象に乗った普賢と眷属である。この二つの図は經典の中に直接的な根拠を見いだすことができない。このような文殊と普賢が眷属を伴って法華塔の両側に分けて置かれるという図像は、莫高窟では初唐の第三三一窟に最も早く出現しており、「絵師はさらに他の品、ひいては他の經典に多く出る菩薩を加えて、法華会の周囲に対称的に置いた。たとえば左側に獅子に乗った文殊と右側に象に乗った普賢が序品には出ないようである。文殊は法華会に参加する一番上位の大菩薩であるが、現存する三種の漢訳本の『法華経』の中に

は、いずれも彼が獅子に乗ることに言及していない。文殊が獅子に乗ることは、初唐訳の『陀羅尼集經』に由来しており、法華經變の部分的内容はその他の經典から出ているとわかる。法華會に趣いた十八人の大菩薩の中にも、普賢菩薩はおらず、普賢が象に乗るといふ姿は、『法華經』の普賢菩薩勸發品に見られる。この品には、釈迦仏が自分の涅槃を説いた後、もしある人が『法華經』を誦誦すれば、普賢菩薩は六本の牙をもつ白い象に乗ってやって来て守護することが記されている。絵師はしばしば全体の配置の必要に基づいて、他の品の内容を混ぜ合わせて一つにしているとわかる」とされている。⁷⁾

獅子に乗る文殊と象に乗る普賢が対称となる問題に関して、孫曉崗は『文殊菩薩圖像学研究』⁸⁾においてすでに議論しており、その中で『陀羅尼集經』「金輪仏頂像法」においてこうした配置が記されていることを指摘している。法華塔の両側に獅子に乗る文殊と象に乗る普賢を配することは、対称とする文殊變と普賢變の流行と関係があるだろう。「文殊は智をつかさど

り、普賢は理をつかさどる」ということは、世間の人々が同意する考えである。つまり文殊を智慧とし、普賢を實踐として、この両者が合わされば、「万行が兼ね通ずる」ことができる。文殊と普賢の間の本尊は、釈迦仏であることも可能であるばかりか、他の仏であること、ひいては晩期の觀音菩薩であることも可能である。これはすべて文殊と普賢の両者が合わさって「万行が兼ね通ずる」ことができるという觀念と関係しているのかもしれない。法華塔の両側に獅子に乗る文殊と象に乗る普賢ならびにその眷屬を配することには、またこのような意義が含まれているのかもしれない。

図の最も下の角は、両側にそれぞれ一人の菩薩があり、両手を合わせて法華塔を礼拝している。注意すべきことは、この二人の小さな菩薩は、上方の會座にやって来た仏や菩薩とは異なっていることである。他の聖者たちはみな雲に乗ってやって来ているが、この二人の菩薩の体の下だけには祥雲がない。このため、恐らくこの二人の菩薩は、虚空會の大衆と區別するために「表現の」工夫が凝らされたのであろう。彼らは

大地あるいは海から踊り出たものであることを物語っているのかもしれない。図の全体と同時代の法華経変とを比較すると、第三六一窟のこの小さな図は比較的大きな中唐法華経変の中から虚空会の部分を取り取ったものと非常に似ており、この最も代表的な図によって『法華経』の意義を現していることが見て取れる。

第三六一窟の中で最も特徴的なものは法華塔の形式である。他の経変画と非常に相違しており、多くの曲線を帯びた蓮華塔の形式によって現されている。この塔の形式は特殊であり、蕭黙は『敦煌建築研究』において、「壁画のストゥーパ式の塔はやはり一種の変異した形態である。たとえば、先に挙げた中唐第三六一窟の中に、木造二層の樓閣塔が広く曲線曲面を用いて描かれていることは言うまでもないが、一層のレンガと石でできたストゥーパ塔が描かれていることもこうした密教的風格である。レンガと石で作られるけれども、壮麗であり、決して木造に劣ることはない」と述べている。⁹⁾郭祐孟は「敦煌吐蕃時期洞窟の圖像構造——莫高窟360窟・361窟を題として」におい

て、「中心の主塔は、下から上まで全部で次のようなものがある。蓮華が裝飾された須弥円座・蓮華台（正面前方に御道が開く）・上端が収束した円筒の塔身（その中に二仏が並座する）・円梁・斗拱・蓮華形の承檐・部分的な吐蕃の紋様で裝飾されている攢尖（宝形造）という漢式の円形の屋頂・塔刹（覆鉢・華の垂れた飾り物・三重の露盤・月牙・摩尼宝珠を含む）である。これは敦煌建築学者に『ストゥーパ式塔』と見なされていたものであり、密教塔の特殊な美感を備えている。とくに注意すべきことは、塔身の須弥円座を載せるものが、『八葉蓮華』の形を作っており、盛唐以来の方形多宝塔（たとえば莫高窟三二七窟の南壁東側）や円形塔（たとえば莫高窟二一七窟の南壁東側）などの主流な様式と相違することである。日本の東寺の宝菩提院の本法華曼荼羅と『圖像抄』の図例を検討すると、三六一窟の多宝塔の全体の造形は法華曼荼羅の中院と完全に一致していることに気づくことができ、釈迦・多宝ならびに八大菩薩の『法華中院』の構造を反映している。豊富に密教的雰囲気を含んだ三六一窟について

えば、これもまた完全に符合するのである」と述べている。⁽¹⁰⁾

『法華經』は大乗の顕教の中で突出した地位にあるばかりでなく、漢伝密教の中でも重要視されていた。『法華經』も経文の中で自身は「如来秘密の藏」⁽¹¹⁾であると称しており、多くの学者は金剛・胎藏の二部の秘密の法において金剛界は『華嚴經』に由来し、胎藏部は『法華經』に由来すると考えている。⁽¹²⁾唐代に『法華經』はまた「護国三經」の一つと見なされた。河西の密教に対して大きな影響を与えた大師である不空は、生涯、密教によって法を護り国を護ることを重視している。彼が密教の三密の法によって『法華經』を修持したことは、こうした思想が体现するものの一つである。不空は『法華經』を修持するために、『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』を翻訳し、擇地・立壇することがちようど胎藏法と持明法の修持のようであった。不空が『法華經』を重視したことで、法華信仰に密教的な性質が加えられた。

仏教の中のいくつかの懺儀も、また多宝塔を懺悔成

就の証明であると見なしている。『仏説觀普賢菩薩行法經』は「眼根を浄め已って、復た更に大乘經典を

讀誦し、昼夜六時に、胡跪し懺悔して、是の言を作せ、『我れは今、云何んが但だ釈迦牟尼仏・分身の諸仏を見、多宝仏の塔の全身の舍利を見ざらん。多宝仏の塔は、恒に在して滅せず。我れは濁悪の眼なり。是の故に見ず』と。是の語を作し已って、復た更に懺悔せよ。七日を過ぎ已って、多宝仏の塔は、地従り涌出せん」と述べている。⁽¹³⁾莫高窟第三六一窟は、吐蕃が敦煌を統治した晩期の代表的密教洞窟である。法華塔は東壁門上にあり、窟全体の最後のハイライトの一部である。つまり、人々が窟内で法事を終えた後、最後にまなざしがみな東壁門上の多宝塔に向けられたのである。多宝塔が成就の証明と見なされる以上、あらゆる人が最後に多宝塔を見ることが物語っていることは、行われた法事が円満に完了したことを現している。このために、ここに単独で出現する法華塔には明らかな儀礼的な働きが備わっており、これは盛唐以前の法華塔の図像と最も大きく異なっているのである。

小 結

以上、まとめると、吐蕃が敦煌を統治した時期は、依然として北朝以来の法華信仰の伝統が続いており、經典であれ図像であれ、いずれも法華信仰の痕跡を見いだすことができる。この時期に、最も流行した『法華經』は鳩摩羅什訳の『妙法蓮華經』と竺法護訳の『正法華經』であったであろう。図像からみれば、この時期の法華經変にはかなり固定的な図案が形成されており、晩唐以後の法華經変に対して重大な影響を与えている。また、莫高窟第三六一窟の密教法華塔の出現は、この時期の法華信仰の密教化を物語っており、法華信仰のこの時期における重要な発展を反映している。

注

- (1) 方広錫『敦煌仏教経録輯校』江蘇古籍出版社、一九九七年、第四四四―四八〇頁。
- (2) Zōは、日本東洋文庫チベット研究委員会編『スタンブリックチベット語文獻解題目録』（東洋文庫、一九七七年）がもともとの番号と照合したものを七一九八三年）がもともとの番号と照合したものを
- (3) 賀世哲主編『敦煌石窟全集・法華經画卷』商務印書館、一九九九年、第九〇―一〇五頁。
- (4) 下野玲子「吐蕃統治時期敦煌〈法華經變〉小考」、樊錦詩主編『敦煌吐蕃統治時期石窟與藏伝仏教芸術研究』蘭州甘肅教育出版社、二〇一二年、第二〇一―二一二頁。
- (5) この表は賀世哲主編『敦煌石窟全集・法華經画卷』の中の「附録一…敦煌石窟法華經變各品統計表」に基づいて制作した。この中で、莫高窟第四七二窟の現存する壁画は破損が酷く、実際には正確に元の様子を反映できない。莫高窟第一四四窟の時代は中唐から晩唐に接する時期である。
- (6) 「後秦」鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』卷四、「大正新修大藏經」（以下、「大正藏」と称す）、第九卷、三二頁。
- (7) 賀世哲主編『敦煌石窟全集・法華經画卷』上海人民出版社、二〇〇〇年、第四一―四二頁。
- (8) 孫曉崗『文殊菩薩圖像学研究』甘肅人民美術出版社、二〇〇七年、第四五―四九頁。
- (9) 蕭默『敦煌建築研究』文物出版社、一九八九年、第一六二頁。
- (10) 郭祐孟「敦煌吐蕃時期洞窟的圖像結構——以莫高窟360和361窟為題」、敦煌研究院編『敦煌吐蕃文化學術研討會論文集』甘肅民族出版社、二〇〇九年、第一三六―一三七頁。

- (11) 「後秦」鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』巻五、『大正蔵』大正一切経刊行会、一九二四―一九三四年、第九巻、第三九頁。
- (12) 「日」大村西崖『密教發達志』巻二、華宇出版社、一九八六年、第二一一頁。
- (13) 「南朝宋」曇無蜜多訳『仏説観普賢菩薩行法経』巻一、『大正蔵』第九巻、第三九一頁。

(ちやう) ちやうせい Zhaoyao Xiang / 敦煌研究院研究員
(訳・まつもり) ひでゆき / 東洋哲学研究所研究員、
創価大学准教授